

創造へ、そして失敗

この子は葦船（あしぶね）に入れて流し去（や）りつ。次に淡島を生みたまひき。こも子の例（かず）に入らず。

／解説／

【この子は葦船に入れて流し去りつ。】

母音を先に、父韻を後に発音して現象を生まない、即ち創造の行為ではないが、世界にはそういう行為もある事であろうから成り行きのままに世界に流布させた、というわけです。「葦船に入れて」とは五十音言霊図の原理に照らし合わせて、世界の歴史の進行の中では小乗的な信仰等の考え方も必要であろうと世界中に広め、教えたという意味です。葦船が何故五十音図の原理と謂われるのか、は古事記神話の解説が進むにつれて明らかにされます。船は人を運ぶ乗物、言葉は心を運ぶもの、の意から言葉を船に喩えることが出来ます。「葦船に入れて流し去りつ」を日本書紀では「天磐く樟船（あまのいはくすぶね）に載せて、風の順（まにま）に放ち棄（す）つ」と書かれています。磐（いは）は五十葉（いは）の意、く樟（くす）とは組んで澄ますの謎、で全体で五十音言霊図の事です。

【次に淡島を生みたまひき。こも子の例に入らず。】

水蛭子が現象の実相を生まない行為に譬えられるとしますと、同様の行為はもう一つ考えられます。それが淡島です。淡島の淡はアワで主体と客体を意味します。このアとワとの間に天の浮橋、チイキシリヒニの八父韻が懸かれば現象が生まれる事となります。ところが、このアとワは天津磐境の先天構造の中のアとワそのものではありません。心の先天構造に於ては、広い宇宙の一点に何か分らぬが何か、即ち意識の萌芽とも言うべきもの（禅で謂う一枚）が生れます。言霊ウです。その次に何かの人間の思考が加わると同時に言霊ウの宇宙が言霊アとワの宇宙に割判します。この場合のアとワは言霊ウの宇宙が割判して現われたアとワなのです。



ところが淡（あわ）島のアとワは、頭脳内の心の先天構造の動きである「宇宙→ウ→ア・ワ」の過程をネグレクトして、主体である自分と客体である現象とに別れた所から思考が始まる事なのです。ですから淡島の心の運びは天津磐境と呼ばれる人間の心の運びの原則とは全く異なる思考方法となります。（この事については「思うと考えるという事」の章に詳しく説明しました。）この事から現象（客体）に対する我（主体）とは先天構造の中の純粋な主体を表わす言霊アで

はなく、その人の自我、即ちその人自身の経験・知識等の集積である自我であるという事になります。そのため、自我が見る対象の現象は実相を現わす事がなく、自我という経験知識が問いかけた問に対してだけに答えるものとなります。概念による思考形式が此処から始まります。その結論は物事の実相を表わす事が出来ません。淡島即ち実相が淡くしか見えぬ心の締まりと呼ばれる所以であります。これも人間の心の正統な子の数に入れません。

言霊の原理が世の中から隠没した後、言霊学に代わる人類の精神の拠所となる各種の個人救済の小乗信仰の事をいうのであります。言霊の原理は人類歴史創造の規範です。その原理が隠されて、その間に現われた個人救済の信仰、例えば仏儒耶等の信仰は、「人間とは何か」「心の安心とは」「幸福とは」等々、人間の心の救済は説いても、人類の歴史創造についての方策に関しては何一つ言挙げしません。否、言挙げする事が出来ません。現在の地球上の人類生存の危機が叫ばれている昨今、世界の宗教団体から何一つ有効な提言が出されない事がそれを良く物語っています。

世界の大宗教がその点に盲目的な原因は、人間の生命創造の根本英智である言霊八父韻と、それによって生れる現象の要素である三十二の子音言霊の認識を全く欠いているからに他なりません。しかし言霊原理隠没の時代には、信仰心に見えるように生命の实在である宇宙（空）とか、救われを先にし、社会・国家・世界の建設等の創造を捨象してしまう事も、即ち母音を先にし、父韻を後にする発声を示す精神行為も時には必要となるであろう事を、古事記の撰者太安万侶は充分知っていたからに他なりません。

「隠処に興して」の隠処とは「組むところ」の意。頭脳内で言葉が組まれる所のことで、組む所は意識で捉えることが出来ない隠れた所でありますので、隠処と「隠」の字が使われています。では実際には言葉は何処で組まれるのでしょうか。それは子音創生の所で明確に指摘されます。言霊学が人間の言葉と心に関する一切を解明した学問であるという事は此処に於ても証明されるのであります。